

# 宇都宮空襲きょう71年

## 記録活動先駆けに

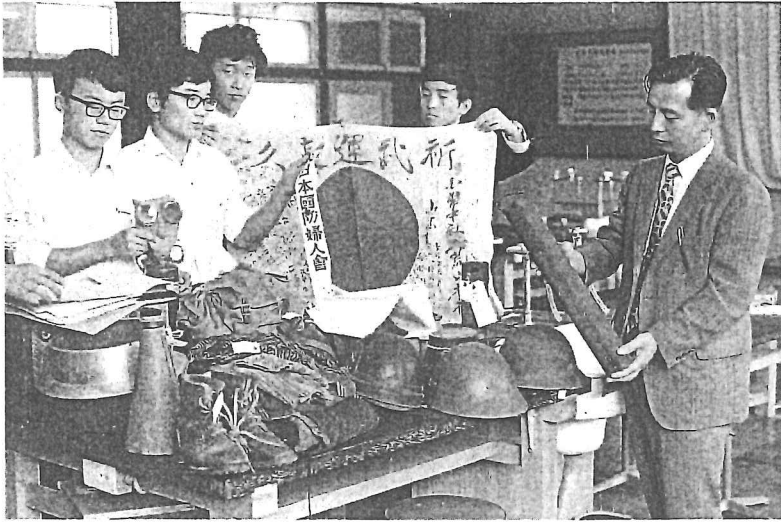
### 43年前の宇都宮高文化祭クラス展示

平和を考える  
とちぎから

1945年7月の宇都宮空襲から71日で丸71年。今こそ関連資料も少なくないが、記録活動の先駆けとなったのが43年前、宇都宮高文化祭で1年5組が取り組んだクラス展示

だ。体験者約200人の証言を集め、スライド上映や展示資料などで被害の実情に迫った。戦後、時は流れ風化が進む一方、国のかたちが論じられる時代になった。当時の関係者は「今の若者には自分らの問題として平和や戦争のテーマに向き合ってほしい」と訴える。  
(手塚京治)

宇都宮高文化祭での空襲展を伝える下野新聞の写真。国旗、ガスマスクなどさまざまな遺物も体験者から借り受けた(1973年10月4日付)



## 体験者200人の証言収集

### 当関係者「戦争と向き合って」

文化祭の展示は空襲から28年後の73年10月、2日間行われた。この年7月14日、担任教諭だった坂本光明さん(81)＝宇都宮市駒生町Ⅱが教室で体験を語ったことをきっかけに、生徒たちが文化祭のテーマとして空襲を選んだという。坂本さんは自らが10歳の時に空襲の焼け跡で拾い、



生徒たちが制作した写真パネルや冊子など。アンケート用紙には体験者がびっしりと証言を書き込んでいる

2016年(平成28年) 7月12日(火曜日) (日刊)

# 下野新聞



船田純一さん 坂本光明さん

保管してきた裁ちハサミを生徒に見せた。傷んだハサミを目にして「皆でやろう」という気持ちになった。教え子の一人船田純一さん(58)＝佐野市堀米町Ⅱは振り返る。

は少なく、生徒たちは独自アンケートを市民に配布。1977通の回答によって、証言が集まった。焼夷弾の殻や寄せ書きされた日の丸、防空頭巾など多くの遺物も借りられた。

成果を一堂に展示し、教室の半分を防空壕に見立てた暗室として、残っていた記録スライド写真を上映。証言を基に制作した被害区域図は、後に市教委がまとめた図を先取りした内容だったという。

下野新聞が当時2度も取り上げるなど反響も大きく、坂本さんは翌年、「宇都宮市戦災を調査する会」に請われ会の活動に参加した。

市内小中高生らが、親から聞いた空襲体験をつづった作文集の編集などに関わった。

船田さんは「全く知らなかった戦争の悲しさがそこにあった。記録がないからこそ自分たちで調べ、戦争を一度と繰り返さないというメッセージを伝えたかった」と記憶をたどる。

坂本さんは「当時は戦争を振り返る活動に触れたい雰囲気もあったが、生徒たちは純粋な思いで調査に駆け回った。今の若者にもぜひ視野を広げ、自分の目で物事を捉える姿勢を培ってほしい」と話している。